

ヒマワリ



■ヒマワリのプロフィール

学名：*Helianthus annuus L.*

科名：キク科

分類：一年草

原産地：アメリカ中西部

北アメリカの中西部からメキシコが原産です。16世紀には、すでにヨーロッパで栽培され、わが国にも江戸時代に渡りました。

学名には、太陽の花という意味があり、「にちりんそう（日輪草）」、「ひぐるま（日車）」とも呼ばれます。園芸品種も多く、鮮やかな黄色のほかに褐色や八重咲きなどがあります。

「ヒマワリ」は、誰もが知っている夏の花の代表です。現在では数多くの品種があり、1.5～3m以上になる高性種や、60～70cmの矮性（わいせい）種、30～50cmほどで花を咲かせる極矮性（ごくわいせい）種に大別されます。

品種によってタネまきから開花までの日数や育て方が異なりますので、購入したタネ袋の裏面の解説をよく確認しましょう。

■ヒマワリの育て方

●タネまき

タネが大きく、タネまきしやすいです。十分に日が当たる場所でないと元気に育ちませんので、日当たりのよい場所にタネをまきます。発芽適温は20～25℃ですので、4～6月がまきどきです。基本的には移植を嫌うので直まきします。

高性種（背が1.5m以上に高くなる品種）は30～40cm間隔、花壇用、切り花用の中高性種は20cm間隔に2～3粒ずつ点まきし、1cmぐらい覆土します。

まく場所が決まっていない場合は、ポットにまいて育苗も可能です。9cmポットに培養土もしくはタネまき用土を入れ、1ポットに2～3粒ずつまきます。

1週間ほどで芽が出ますが、タネをまいてから芽が出るまでは、土を乾かさないように気をつけて水やりをします。



●育て方のポイント

発芽してきたらよく日に当て、水やりはやや控えめにします。本葉が4枚ほどになったら、複数の芽が出ている場合は、最も元気な株を1本残して間引きします。その際に、引き抜くと、つられて残したい株も抜けてしまうので、根元からハサミでカットします。

育苗時期の乾燥、肥料不足は、生育が著しく劣り、病気も発生しやすくなります。乾いたら十分に水をやり、定期的に肥料を与えます。

※高性種は、つぼみを持つころになると、重みで倒れ掛かってしまうこともありますので、その場合は支柱を添え、株元に土寄せをします。

※タネを採取するのは、花が下向きにうなだれ、花びらが枯れて種子が褐色になったところです。茎ごと切り取って、日陰でよく乾燥させます。炒ると食用にもなります。

